

---

**幼馴染にゲーム内へ引きずり込まれたわけなんだが。**

結崎彩香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼馴染にゲーム内へ引きずり込まれたわけなんだが。

### 【Nコード】

N7012X

### 【作者名】

結崎彩香

### 【あらすじ】

俺には黒歴史がある。元不良だという事、そして隠れオタクだという事。そんな俺が同類にしてハイレベルな美人さんである幼馴染さんに強制されてとあるゲームを始めたわけなんだが、幼馴染たんつてばその世界に行きたいとか言い出しやがった。どうでもいいけど、俺を巻き込まないでねハニー。……って、そんなわけにいかないよな、どうせ巻き込まれポジションですとも。不良になったのも元をたどればお前が原因だしな。

畜生、リアルの幼馴染なんて全然萌えねえ。

元不良にしてオタクの男子高校生が幼馴染と共に異世界トリップします。最初のうちはトリップしません。基本的に主人公の一人称描写で、テンションはオタクに近いものとなっております。ネタ的な意味でばーいずらぶ要素・言語が出てきます。メインヒロインがばーいずらぶを音読するかもしれませんが。残酷な描写、というより戦闘描写が入ります。最初R18にしましたが、そこまで酷い描写は入らないだろうという設計になったので移しました。作者は同一人物です

第一話 黒歴史って思い出すと赤面するよな。(前書き)

この小説と同内容のものが初投稿だったので、初投稿に近いです。  
ご意見感想等ありましたらお寄せください。

他の小説様と被っているところがありましたら、ご連絡いただければ有難いです。

しばらく説明回が続きます。お付き合いいただければ幸いです。

## 第一話 黒歴史つて思い出すと赤面するよな。

俺は黒歴史を持っている。

まあ、人は多かれ少なかれ後悔することがある、そうだろう？

だが俺の黒歴史は、多かれの方属するものだと思っし、とても今は笑って話せるような代物じゃない。

つまり何かと言うと、俺は不良だったのである。

しかも、中二病みたいな二つ名まで貰えるほどに強いやつだった。二つ名とか今じゃ恥ずかしくて死ねる。

元々は強かったし、空手、剣道、棒術を嗜んでいたからな。

周りからはチート野郎って呼ばれたけど。殴ったけど。

基本的に喧嘩は買う側だったし、かつあげとか悪いことはしていなかった。

時々俺と目が合った奴らが金を差し出してくるけど、かつあげはしていない。ボランティア精神って大事だよな。

そんな俺の黒歴史は中学卒業と同時に幕を閉じた。父親の転勤についていくことになったのだ。

いい加減喧嘩にも舎弟にも飽きていた俺は、丁度良いから不良からも卒業することにした。

で、中学時代を黒歴史呼ばわりする子になった。良い子になったのである。

親は泣いて喜んだ……訳ではなく、何故か幼馴染と一緒にあって「つままない！」と責めてきた。わけわからん、普通喜ぶよな。

しかし、俺としては高校生になったのだから赤い青春よりピンク色の青春の方が魅力的なわけで。

金髪だった髪を黒髪に戻し、オールバックをやめて鋭い目つきを前髪で隠す。

ついでに伊達眼鏡も購入。やっぱ良い子と言えば黒髪と眼鏡だよな？ 伊達なのが惜しいが。

そしてここからが大事だが、俺の黒歴史は不良だけに止まらとない。こっちの黒歴史は今でも続いているからさらに救いようがない。まあ、止める気もないのだが。

家族と同類の幼馴染にしか知られていないのでいかんせん恥ずかしい限りだが、俺はオタクだ。それも重度の。

基本的な媒体は漫画、アニメ、ネット、小説で、ゲームは付き合いでやる程度だ。高いから自分から買うことは少ない。特にアニメが好きのため、自室に俺用のテレビがあるのはありがたい。ちなみに声優は2・5次元だと俺は思う。

隠れオタクだからイベントなどに出れないのは悔しいが、幼馴染がお土産を買ってきてくれるのでそこまで苦ではない。ただ、時々ぼーいずらぶなる物をこっそりお土産に混ぜてくるのだけはやめてほしいと思う。俺にどうしろと。

俺の幼馴染、黒木夢子くろき ゆめこは腐女子だ。そして俺の同居人でもある。

小学生の時に夢子の両親が海外へ転勤になり、ついていくのを拒否した夢子の面倒を俺の両親が見ているのだ。

二次元ならおいしく頂けたんだが……なんてぼやきたくなるくらい夢子と俺の相性は悪い。

俺の幼馴染さんは俺より重度のオタクでキチガイなのだが、ハイレ

ベルな美人さんなため、耐性のない俺は強く出れない。

不良なら女なんて食っちゃ捨て食っちゃ捨て、みたいなイメージがあるが、俺は貴重な純潔不良なのである。絶滅危惧種だ。

夢子のキチガイっぷりに女怖いとビビっていたのと、俺に近づくと女たちの濃い化粧ときつい香水が気に入らなかったのが原因だ。主に前者だけど。

で、なんでこんな身にならん話をしているかというと。

「言ったよね？ 暴走するなって。周りをちゃんと見て行動しろってあたし何度も言ったよね？」

色々俺の人生に影響を及ぼした奴が、目の前で麗しく微笑んでくれるわけだ。

俺でなければ一発で惚れてる笑顔なんだが、

「ごめんなちゃい、てへぺろっ」

「……………」

「……………スイマセンデシタ」

笑顔怖いお。

第一話 黒歴史って思い出すと赤面するよな。(後書き)

最初R18にしてましたが、そこまで酷い描写は入らないだろうという設計になったので移しました。作者は同一人物です。

あちらでは完結後に番外編などで年齢制限が入る物を書くかもしれないのでそのままにしてありますが、本編の内容は基本的に同じです。

混乱された方が居ましたら申し訳ありません。



## 第二話 誰にでも苦手な事ってあるよね。

「ほんとにさ、その戦いが長引きだしたらフィーバーする癖直してよね。連携が大事なのよ、わかる？」

でかい黒歴史を二つほど抱えていて、そんじょそこらの奴には負けない俺だが、ただ今正座なう、だ。  
理由は、ついさっきまでプレイしていたゲームにある。

新感覚・体感RPG。剣と魔法の世界へようこそ、みたいな題名だった気がする。

公式名称は横文字だが覚えてないので割愛して説明すると、つまり普段の俺に近い感覚で動けて喋れるゲームだ。

俺たちのプレイしていたゲームは中世ヨーロッパ風の世界観で、魔法や魔族、魔物が存在する。

最初に決めるのは名前と外見と性別くらいで、防具や武器、使用できる属性はクエストやイベントを通過したりレベルが上がったりする事で増える。

職業も、最初に冒険者を選択した後、レベルが高くなれば薬師・鍛冶師・商人のどれか一つと兼業できるようになる。

専門ギルドがそれぞれあるため、兼業する場合は新しいギルドにも所属しなくてはならないが。

「ねえ、聞いてる？ 勝利したのはいいけど、あんたがあたしより獲得経験値が多いの納得いかないのよね、暴走したくせに」

夢子は【ユメ】という名でハイエルフの女性を選択している。透き通るような銀色の髪と冷ややかな紫色の瞳が印象的だ。

彼女のファースト職業は冒険者の近接戦闘型魔術師で、セカンド職業は薬師。

エルフと言えば魔法や弓矢での遠距離攻撃が主だが、夢子は斧を振り回して戦う近接型を選んだ。

理由を聞くと、「だってエルフが一番美人だけど、やっぱり自分の手で敵を討ち取りたいじゃない！」だそうだ。だよーねー。

そんな夢子のパートナーを務める俺はダークエルフの【シヨウ】だ。女性のように長い黒髪、森を連想させる緑の瞳で割と気に入っている。

ファースト職業は冒険者の魔槍使い、セカンド職業は鍛冶師だ。魔法も使うが、基本俺も夢子も近接戦闘型だ。

夢子がハイエルフを選んだため、俺は半強制的に対となるダークエルフを選ばされたが、今のところ不便はない。

このゲームの世界には、多数の魔族、魔物が存在する。

エルフ族（ハイエルフ、ダークエルフ、ウッドエルフ）、ドワーフ族、マーフォークに亜人（猫娘や狼男など）がプレイヤーの選択できる魔族だ。

それぞれの長所は、エルフは森など緑のあるところで戦うと有利で、人間も含めたプレイヤーの選択できる種族の中で一番魔力が高い。パワーバランスをうまく考えないと俺たちみたいな近接戦闘型は不利だが、魔法も武器もうまく扱えれば敵なしだ。

ドワーフ族は攻撃力が一番高く、死にくい。セカンド職業に鍛冶師を選ぶ者が多い。

いかんせん見た目が小さくて不恰好だが、大きい武器が使えないということはない。魔力は魔族の中で一番低い。

マーフォークがいれば、海や川で船を使う必要がない。パーティに一人でもいれば、お金を使うことなく向こう岸に渡れる。

水魔法に特化しており打たれ弱い、海や川の近くで戦えばかなりのスピードと魔攻を見せる。

亜人は回避率と敏捷度に長けており、武器がなくともその身一つで十分立ち回ることができる。

ドワーフ族の次に魔力が低い、基礎となる動物によって得る種族スキルが違うのも利点の一つだ。

プレイヤーに一番人気なのは、人間だ。

プレイし始めた時に一番体に馴染みやすい種族であることと、成長しやすいことが理由として挙げられる。

基本的に伸ばせるステータスは攻撃、防御、魔攻、魔防、素早さ、命中率、HP、MP、LPだが、最も全体のバランスが良くなるのは人間だ。

他に伸ばせる物として、スキルがある。種族スキル、武器スキル、職業スキル、イベントスキルなど多数あるが、これらは使っていくうちに鍛えられる。

「……ねえ、聞いてるう？ かけるん聞いてるう？」

いかん、長くて怖い説教を聞き流して現実逃避していたら、目の前の幼馴染が鬼になっていた。

夢子が俺のことをかけるん、と呼び始めたら、それは命の危機が迫ってきたことを意味している。

というわけで、

「さーせんしたあー！！」

命乞いのポーズ  
スタイリッシュ土下座。

額を床にこすりつけている俺を（多分）見下ろし、いや見下し、夢子は溜息を吐いた。うう、黙って溜息吐かれるのが一番堪える。

ついさつき魔窟内で戦ってきたのだが、ちょっと俺が暴走して夢子ファイバーの担当しようとしていた魔物まで狩ってしまったのだ。

売り出されてすぐに始めてプレイ歴約一年でカンストの域に入ってきた俺たちなんだが、いかんせんゲームに慣れてない俺は初心者の時の癖が出てしまう時がある。

経験値、つまりレベルを上げたりステータスを上げたりするときに使うものだが、これはどれくらい働いたか、によって振られるため同じクエストを受けた仲間でも得られる値が違う。

レベルが上がる、イコールステータスが上がる、なのだが、レベルを上げるだけではステータスのカンストは狙えない。

ステータスを上げるためにはレベルを上げるのが一番だが、経験値をそのまま割り振ってもステータスを伸ばすことはできる。

ステータスやレベルは伸びれば伸びるほど経験値が必要になるが、初期のころに経験値で直接ステータスを伸ばしておけばレベルが高くなった時に同レベルと比べて強くなれるのだ。

初期の頃は一番レベルを上げるのに必死になっってしまうのが普通だが、俺は夢子に命令されて二人で地道にステータスを上げていた。そんなわけで、同レベルの者達よりも多く働かなければならなかったために手の届く範囲の敵は全員倒す方向で戦ってたら、いつの間にか暴走すると仲間の獲物までとってしまう癖がついてしまったのだ。

経験値を稼ぐのは平和なクエストでも可能だが、やはり魔物や賊を倒すのが一番手っ取り早いからな。

「……ま、いいよ」

長い沈黙の後、もう一度夢子が溜息を吐いて俺は解放された。自由  
つていいね、空気が美味しいです。

土下座を解いて痺れ始めていた足を揉んでいると、夢子がノートや  
ら教科書を持ってきた。……ん？

「じゃ、勉強お仕置きしよっか」

ジーザス！

### 第三話 猫被り？ 自己防衛と云え。(前書き)

今回は主人公たちの通う学校の説明回です。

説明回が思ったよりも長引きます……。ごめんなさい。

一応注意ですが、ぼーいずらぶ的要素はギャグであり、カプとかが登場することはありません。

### 第三話 猫被り？ 自己防衛と云え。

「しいろろろのー！ 今日も今日とて幼馴染ちゃんと登校ですか羨ましいです爆発しろ！」

次の日、幼馴染たんに引きずられて登校してきた俺を出迎えたのは友人Aの嫉妬溢れる醜い文句だった。夢子のお仕置きからもまだ完全には回復してないのに、何なのこの仕打ち。

とは言え、気持ちは分かる。

可愛らしくセットされたハニーブラウン色の髪、茶色に近い黒色の二重のぱっちりとした瞳、すっと通った鼻筋、形も色も良い唇、モデル並みのスタイルとファッションセンス、どれをとっても完璧だ。アレの本性を知らなければ、すぐ傍に居る幼馴染の俺を妬むのも無理はない。

あいつはオタクである事は隠していないが公表しているわけではないし、オタクっぷりを発揮するのは俺や家族の前でだけだからな。自重さえしていれば絶世の美少女ってやつだ。

奴の痛い発言としては、「あたし、将来新宿に住むからあんたは通いの秘書になりなさい。そして弟に恋慕的な意味で執着、依存するのよっ」が例の一つだ。咄嗟に「俺に弟はいないぜよ」と返したが、後から考えると否定する箇所を間違えた気もする。

「あー、ごめんごめん。今日の昼奢ってやるから黙れ？」

「誠意がないっ！ お前謝るときは誠心誠意謝りそうだな見た目してののに、意外と上から目線な俺様キヤラー！？ ギヤップ萌え狙ってるのかこの野郎！」

「俺様？ ギャップ萌え？ ごめん、ちょっと言ってくることもわかんないや、普通の言葉喋ってもらえるかな」

いや、本当はバリバリわかりますとも。でもですね、たとえ同類かもしれないけども、俺は隠れオタクなのですよ。

そして俺がオタクだと知られて夢子もそうなのだろうかと見られれば、あいつは自分の選んだ相手にしか告白しない人間だから、俺が怒られてしまう。

なのでこの場合、俺がとるべき正しい行為は「オタク？ ああ、漫画とかアニメとか好きな人だね。僕も好きだよブーチ。古本屋でたまに読むんだ」というキャラで押し通すことだ。

まあ、僕キャラは実際には無理なだけだな。眼鏡のおかげで多少は誤魔化せているが、目つきは今も悪い方だし。身長も172cmと、高校一年生にしては十分な高さだ。

ていうか友人A、お前やつぱりオタクだったんだな。最初に話した時に「あんな美人さんとフラグ立てれたら幸せだよな、ああ、幼馴染ポジションとか羨ましますすぎる自重しろ禿げろ」と言われたんで疑ってはいたが。

その時も「フラグ？ 旗がどうかしたのかな？」と返しましたが、ここまでくると真面目キャラ通り越して天然キャラな気がするが、立ち回りやすいので問題はない。腹黒いことを言っても許されるし。

入学して半年が経ち、入学と同時に作られた俺と夢子のキャラは今のところ崩れる気配はない。

大人しめの口調なんてアニメや少女漫画で予習済みだからな、楽勝だ。俺は雑食だから余裕で少女漫画も読めるのです。

時々非オタクの正しい反応、というのが分からなくなる時もあるが、そういう時は空気を読んで発言すれば致命的な間違いを起こすこと



はずない。

「あー、そうだよな！ お前には分かんないよな、いいぜそのまま  
でいてくれ！」

何か納得したように、俺に立てた親指を突き出してくる友人A。うん、ごめんね、実はもうとつくに汚れてるんだ。体は真っ白だけど。うん、とよく分かってないような顔を拵えつつ、親指を突き出して  
いる友人Aの手を握る。そしてそのまま、親指を本来曲げられない  
方向に曲げた。だって、うるさいのだから。僕悪くないお。

「……………っ！」

ぐつと歯を食いしばりつつ、苦痛に堪える友人A。いいね、そうい  
う顔。不良の血が疼くのに気付きながらも、俺はそれ以上親指を曲  
げるのをやめた。

そんな俺を涙目で見てくる友人A。そんな俺たち二人を血走った目  
でまじまじと見つめる夢子。……おい、メッキ剥がれてんぞ。

夢子の方に目を向け、顔を指さすとハツと気づいて瞬時に澄ました  
顔を取り繕った。だが俺には分かる。あの顔はぼーいすらぶなる物  
について妄想している時の顔だ。

「ごめんね、友人A。俺今日ちょっと疲れてて」

「まあテスト週間入ったしなー。お前頭良さそうだな見た目してるの  
に実は底辺レベルだもんね……っっていうか友人Aってもしかしても  
しかしなくても俺！？ 俺なの！？」

「うるさい、踏み潰すよ。……まあ、何があつたかと言うと、昨日  
夢子に（勉強という名の）お仕置きされて、しかも寝かせてくれな

くて、大変だったんだ」

素直に謝ると、友人Aがなんか見下したような目でこちらを見てきたので、わざとぼかす所をぼかしていろていっくな事があったかのように話す。よくあるよな、こういう勘違いされちゃう台詞。

まあ、頭が悪いのは事実だ。中学時代は真面目に勉強しようとして授業に出ても先生は固まって授業してくれなかったし、そうじゃない時は喧嘩売られたりして、全然勉強できなかったからな。

高校に入学できたのは、偏ひとへに夢子のおかげだ。俺の幼馴染ってば、俺と一緒に喧嘩に明け暮れていたにも拘らず、何故か滅茶苦茶頭が良かった。美人スペックって凄いね。

「え、おま、え……？　そういう関係なの……？　ナニがあったの……？」

おっと、思っていた以上のダメージを与えることができたようだ。物凄く面白い顔になっている。

しかしあまり調子に乗るのも良くない、これは夢子も同乗している爆撃だからな。うっかり自爆したりしたら夢子にまたお仕置きされる。

「お仕置きっていうか、勉強だけだね。俺今回化学と数学がよく分からなくて」

「あー、なるほど。確かに一年の間は文系の頭してても化学とか取らなきゃだし、お前の頭じゃそりゃ大変だわなー」

事実を教えてやると、途端に納得したかのように頷く友人A。「お前の頭じゃ」とか、マジで捻り潰すぞてめえ。

とまあ、こんな感じに朝からダラダラ喋っていたら、先生が入って

きてHRが始まった。うんうん、良いね、こういうだるそうだけど爽やかな雰囲気って。

俺達の通っている学校、烏丸学園からすまのの制服はブレザーだ。中学時代は学ランだったから新鮮味があって嬉しい。

ここは文武両道を謳っており、生徒は全員何かしらの部活に入らなければならぬ。俺は最初剣道部に入ろうかと思っていたが、結局弓道部に入部した。

その理由は「あんた黒髪で眼鏡だし、姿勢良いんだから弓道部入りなさい。的を睨む鋭い目つきで女どもを惑わせばいいのよ、萌えるわ」と夢子に言われたからだ。モテそうだな、とか思ったからではない。断じて。

その夢子は空手部に入った。「鬱陶しい男どもを蹴散らすには、やっぱり強いってことを知らしめるのが手っ取り早いわよね」だそう

だ。猫被りはどこ行ったと思ったが、強くて綺麗で格好いい、ということとで女子からの人気が高まったらしい。入学してすぐは美人すぎることで陰口とか言われてたし、好かれたなら良いかな、なんて思った。

ちなみに俺、白野翔しほのあきにそんなハイスペックな幼馴染が居ること何か嫌がらせがあったかと言うと、最初の方こそ色々やられたり言われたりしたが、不良スキルと天然スキルで回避した。

手を出された時は遠慮なく手加減しつつ倒したし、嫌がらせしてきた時は教室内で夢子に告げ口したりときつちりお返ししていたため、今は夢子のことに関しては友人たちしか触れてこない。

棚から牡丹餅だったのは、夢子に密告する際に泣き真似とかしたら

クラスの女子の母性本能をくすぐったらしく、子ども扱いで可愛がられるようになったことだ。夢子にも「ぐっじよぶ」と褒められた。“こんじきのわし金色の鷲”と呼ばれ恐れられた不良が子ども扱いとか軽く泣けるが、避けられるよりはいいのでよしとしている。弓道部の部員なのもいいギャップ萌えのようだった。

時々俺を可愛がってくれている女子集団から「天然眼鏡わんこ」とか「わんこ受け萌えー」とかいう声が聞こえてくるけど、そんなの無視だ。夢子で鍛えられますから、こんなの屁でもないですわよ！……ぐすん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7012x/>

---

幼馴染にゲーム内へ引きずり込まれたわけなんだが。

2011年12月24日07時50分発行